
共同研究の経過と概要

日高 薫

本研究報告書は、国立歴史民俗博物館が2013年度から2015年度にかけて実施した基盤研究（展示型）「学際的研究による漆文化史の新構築」およびその成果公開の一環として2017年度に実施した企画展示「URUSHI ふしぎ物語—人と漆の12000年史—」（会期：2017年7月11日～9月3日）の成果をまとめたものである。

1. 研究の目的と方法

ウルシとその仲間が生育する東アジアおよび東南アジアの諸地域では、それぞれ特色ある漆工技術が発達し、ユニークな文化をかたち作ってきた。漆文化圏とも呼びうるこれらの地域にみられる漆の文化は、多くの共通点をもち相互に影響を与え合う反面、実際には、利用される漆の木の種類の相違や、気候風土・民族などによって、それぞれの個性を強調する方向で発展している。

本研究は、このようなアジアの漆文化の総体を視野に含めつつ、縄文時代から現代にわたる日本の漆文化を、多視点的なアプローチにより、総合的にとらえることを目的としておこなわれた。

多様な様相と展開を示す漆文化の全体像は、出土資料・伝世資料・文献資料・伝承資料・伝統技術等をあわせて検討することによってはじめて理解されるが、従来の研究では各学問分野で個別に論じられ、一部の領域では大きな成果をあげながらも、これらが統合されることはなかった。本研究においては、研究手法を異にするさまざまな分野のトピックを、展示の主要な構成要素と位置づけ、具体的な展示資料を通じて可視化し、これらを総合することによって、植物としてのウルシの特性とそれを利用する漆文化の全体像を浮き彫りにすることを目指した。このような過程で明らかとなった課題をもとに、新しい漆文化史の構築をはかりたいと考えたのである。

本研究の研究期間においては、各時代・地域の漆文化の多面的展開を網羅することは困難であるため、近年成果が著しく、注目されるテーマを中心に、研究成果の整理・再検討をおこない、あわせて今後展開可能な研究課題の発見の機会とすることとした。とくに、以下の3つの点に重点を置いて議論を深めた。

- (1) 国内外における漆および漆器の流通と技術交流 植物学・考古学・文献史学・美術史学等に共通するテーマとして交流の問題に注目する。ここでは製品としての漆器のみならず、漆液の流通も対象とする。
- (2) 自然科学的分析手法の開発による漆文化の解明 自然科学との協業により、何が明らかにされるかを紹介し、また、開発された分析手法の応用として、館蔵漆器資料の剥落片、出土漆

器等の分析を行う。

- (3) 漆の特性と多様な漆文化 植物としてのウルシや漆液のもつ特異な性格が、漆文化を特徴づけてきたことを、現代的な視点を交えて考察する。

2. 研究組織

(◎は研究代表者、○は研究副代表者、※は展示プロジェクト副代表、所属は2015年度末のものを記す)

岩淵 令治 学習院女子大学国際文化交流学部・教授
岡田 文男 京都造形芸術大学芸術学部・教授
北野 信彦 東京文化財研究所保存修復科学センター伝統技術研究室・室長
鈴木 三男 東北大学学術資源研究公開センター・名誉教授
竹内奈美子 東京国立博物館学芸研究部調査研究課・工芸室長
多比羅菜美子 根津美術館・学芸員
中里 壽克 学識経験者(東京文化財研究所・名誉研究員)
永嶋 正春 学識経験者
能城 修一 森林総合研究所木材特性研究領域・チーム長
宮腰 哲雄 明治大学理工学部・教授
宮里 正子 浦添市美術館・館長
山崎 剛 金沢美術工芸大学美術工芸学部・教授
吉田 邦夫 東京大学総合博物館・特招研究員
四柳 嘉章 石川県輪島漆芸美術館・館長 [以上館外]

※工藤雄一郎 研究部考古研究系・准教授
小池 淳一 研究部民俗研究系 教授
齋藤 努 研究部情報資料研究系・教授
○林部 均 研究部考古研究系・教授
◎日高 薫 研究部情報資料研究系・教授 [以上館内]

3. 研究経過

[2013年度]

本研究では、最終的な研究成果発表形態としての企画展示の各コーナーを想定しながら、諸分野における漆文化研究の現状に関する報告をおこない、分野間の研究状況を確認し総合化して共通の認識を形づくるとともに、新たな課題発見の場とすることを目標とした。一方、資料の調査・分析等に関しては、テーマごとに、人文系と自然科学系の研究者による分科会を複数回開催することによって、実質的な成果をあげていけるような方法をとることとした。初年度である2013年度は、

展示の基本構想について意見交換をしつつ、最新の発掘成果による成果や植物学の研究状況についての理解を深めた。

(1) 研究会と資料調査

◇ 2013年6月23日(日) 於：歴博

研究の全体構想・役割分担を決定し、国立歴史民俗博物館所蔵の漆関係資料(亀ヶ岡遺跡出土品、輸出漆器など約70点)の調査をおこなった。

◇ 2013年11月8日(金)、9日(土)、10日(日) 於：沖縄県

沖縄県観光商工部商工振興課工芸技術支援センターにおいて琉球漆器製作工程を見学し、浦添市美術館において所蔵資料の調査をおこなった。これらを通じて、琉球漆器の製作技法の詳細と、実際の遺品に用いられた技術に関する理解を深めることができた。また、シンポジウム「漆の科学分析を通し、琉球漆器の歴史や技術に迫る」(浦添市美術館)に参加した。

◇ 2014年1月26日(日)・27日(月) 於：明治大学

- ・研究発表「桃山文化期における輸入漆の調達と使用に関する調査」(北野 信彦)
- ・研究発表「展示構想について」(日高 薫)
- ・研究発表「植物学的視点からのウルシ」(鈴木 三男)
- ・研究発表「ウルシと縄文時代の植物資源利用との関係」(能城 修一)

これらの報告により、植物学の分野におけるウルシに関わる最新の研究情報を得ることができた。また人文科学と自然科学の協業による最新の研究状況を認識した。

(2) 資料の分析調査

これまで永嶋が分析してきた縄文時代の漆関係資料の年代測定をおこなった。(工藤・永嶋)

(3) 基礎資料の収集と集成

漆製品出土遺跡一覧の作成(都築)および館蔵の漆関係資料のリストアップと調査を進めた。(日高・林部・工藤・都築)

[2014年]

2014度は、展示の基本構想について意見交換をしつつ、分析科学および美術史学等の研究状況についての理解を深めた。

漆の化学分析の方法の現状について共通認識を得ることができ、人文科学の研究者との協業により、具体的にどのような成果が想定されるかについて議論を深めることができた。Sr同位体比分析法は大陸と列島の漆の区別を可能とする方法として注目されるが、国内の漆の地域差をも同定できる可能性があることがわかったため、今後は、こうした観点での古代出土資料の分析も試みることにした。

(1) 研究会の開催

- ◇ 2014年6月1日(日) 於：明治大学 駿河台キャンパス
 - ・ 研究発表「熱分解—GC/MS分析による漆分析について」(宮腰 哲雄)
 - ・ 研究発表「Sr同位体比分析による漆分析について」(吉田 邦夫)
 - ・ 研究発表「遺跡出土漆(縄文時代)の年代測定結果報告」(永嶋 正春・工藤 雄一郎)
- ◇ 2014年12月25日(木) 於：明治大学 駿河台キャンパス
 - ・ 研究発表「東北地方に伝わる蒔絵絵馬に関して」(竹内 奈美子)
 - ・ 研究発表「南蛮漆器に類似する漆器に関して」(日高 薫)
 - ・ 研究発表「石川県三引遺跡および福井県鳥浜貝塚出土漆塗櫛の年代測定」(工藤 雄一郎・四柳 嘉章)
- ◇ 2015年2月25日(水)～27日(金) 於：金沢
 - ・ 近世近代漆工芸関係資料の調査(金沢市立中村記念美術館)
 - ・ 伝統工芸の漆工房の見学(西村家)
 - ・ 公開研究会(2月26日・於金沢美術工芸大学)
 - 発表1：竹内 奈美子「五十嵐道甫様式の秋草蒔絵」
 - 発表2：田島 充子「19世紀における清水九兵衛の活動と作品」
 - 発表3：山崎 剛 「漆工芸の近代と現代」
 - 発表4：南 ゆりこ「1950年代の日本における工芸団体の歩み—漆芸家・高橋節郎の活動を中心に一」
 - 調査1：金沢美大が所蔵する五十嵐道甫様式の作品, 近代・現代の作品
 - 調査2：金沢美大が収集中の「平成の百工比照」(漆工分野)
 - ・ 現代アートの領域における漆造形作家のアトリエ見学(田中 信行氏)
 - ・ 金沢美術工芸大学卒業制作展(金沢21世紀美術館)
 - ・ 今日における漆の材料・道具・製品の見学(高野うるし店・能作・輪島キリモト)
- ◇ 2015年3月21日(土) 於：明治大学 駿河台キャンパス
 - ・ 「琉球漆芸の基準構築の試み」(宮里 正子)
 - ・ 「日本に伝世した彫漆器について」(多比羅 菜美子)
 - ・ 「うるしの俗信と昔話をめぐって」(小池 淳一)

(2) 資料の分析調査

輸出漆器(歴博所蔵)の剥落片の分析(宮腰・岡田・吉田), およびこれまで永嶋が分析してきた縄文時代の漆関係資料の年代測定(工藤・永嶋)をおこなった。

(3) 基礎資料の収集と集成

漆製品出土遺跡一覧の作成(都築), および館蔵の漆関係資料のリストアップと調査をおこなった。

【2015年度】

2015度は、最終年度であるため、展示の具体的なコーナー案と展示候補資料を念頭にいれながら情報・意見交換をすすめた。また、過年度で扱うことが少なかった民俗学での研究成果、特に民具などの伝世資料、技術伝承について実地調査し研究交流をおこなった。

(1) 研究会の開催

- ◇ 2015年7月4日(土) 於：明治大学 駿河台キャンパス
 - ・ 研究発表「蒔絵の歴史とその普及の問題」(中里 壽克)
 - ・ 研究発表「「蒔絵」の源流について—金銀器とその装飾技法からの考察—」(有福 小百合)
 - ◇ 2015年9月4日(金)～6日(日) 於：青森県八戸市, 岩手県二戸市
 - ・ 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館特別展「漆と縄文人」・常設展の見学
(八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館)
 - ・ 研究発表会(9月4日・於：八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館)
 - 発表1:「是川中居遺跡の漆製品」(市川 健夫)
 - 発表2:「関東の縄文漆文化」(小澤 清男)
 - 発表3:「亀ヶ岡文化と漆」(永嶋 正春)
 - ・ 浄法寺地域の近世近代漆絵皿の見学(二戸市浄法寺総合支所)
 - ・ 浄法寺地域の漆林・漆掻きの見学, 漆掻き職人への聞き取り調査
 - ・ 浄法寺地域の漆工房の見学(滴生舎)
 - ・ 寺院における漆工芸関係資料の見学(天台寺)
 - ・ 浄法寺地域の近世近代漆関係民具の見学(浄法寺歴史民俗資料館)
 - ・ 北東北縄文遺跡における植生復元, 漆製品の見学(一戸町御所野博物館)
漆の採取現場の実地見学をおこなったことにより, 漆の採取方法, 漆生産の現状等について理解を深め, 共通認識を得ることができた。
 - ◇ 2015年12月23日(水) 於：明治大学 駿河台キャンパス
 - ・ 研究発表「岩手の漆の話」(工藤 紘一)
 - ・ 研究発表「会津漆器の江戸流通について」(岩淵 令治)
 - ◇ 2015年10月10日

国立歴史民俗博物館において、展示プロジェクト委員会を開催し、展示の趣旨、展示構成案、巡回計画や協力を依頼すべき機関の検討と今後のタイムスケジュールについて確認をおこなった。また、共同研究第11回研究会を同時開催した。

 - ・ 研究発表「朱漆器について」(岡田 文男)
 - ・ 「企画展示の概要について」「展示構成案について」「企画展示に向けたスケジュール」
(日高 薫)
 - ・ 企画展示室 企画展示「大久保利通とその時代」の見学
 - ・ 館蔵漆工制作関係資料 漆工芸作家勝田精一氏漆工制作用具一式の見学
 - ◇ 2016年1月17日

明治大学駿河台キャンパスにおいて、展示プロジェクト委員会を開催し、各委員から担当
-

箇所での展示構成案、展示候補資料の発表をおこなった。

・「展示構成案と展示候補資料について」(各委員)

◇ 2016年3月14日(月) 於：明治大学 駿河台キャンパス

明治大学駿河台キャンパスにおいて、展示プロジェクト委員会を開催し、各委員から担当箇所での展示構成案、展示候補資料の発表をおこなった後、全体の展示構成を検討し決定した。また、共同研究第13回研究会を同時開催した。

・「展示構成案と展示候補資料について」(各委員)

・「展示構成について」「企画展示に向けたスケジュール」(日高 薫)

・研究発表「合鹿椀と輪島塗」(四柳 嘉章)

・研究発表「大宰府官衙周辺不丁地区出土の漆付着土器—古代の漆文化を支えたもの—」(林部 均)

・研究発表「近世江戸遺跡出土漆器の様相—17世紀前半の事例—」(都築 由理子)

(2) 資料の分析調査

大宰府官衙周辺不丁地区出土の漆付着土器の漆塗膜の蛍光X線分析、クロスセクション、熱分解—GC/MS分析(宮腰)、およびこれまで永嶋が分析してきた縄文時代の漆関係資料の年代測定(工藤・永嶋)をおこなった。

(3) 基礎資料の収集と集成

2014年度までにリストアップした漆製品出土遺跡一覧に、出土遺物の実測図や観察表を加えて集成した(都築)。館蔵の漆関係資料のリストアップと調査をおこなった。

4. 研究成果の概要

(1) 各分野における研究の進行状況の把握

植物学・考古学・文献史学・美術史学など各分野から、縄文時代より現代に至る漆をめぐる文化について、諸問題を抽出することができた。とくに縄文時代から古代にかけての漆文化史について深い議論ができたのに対し、中世から近世に関しては、美術史を中心に技術の展開や美意識の変化などは把握できるものの、考古学や文献史学による研究の蓄積がまだ十分とはいえず、展示を構成するうえでも課題が残った。また民俗学的なアプローチについても、列島全体にわたる研究はみられないなど、研究史上の問題が明確となった。

(2) 文理融合研究による成果

植物学の分野におけるウルシに関わる最新の研究状況、また自然科学的手法を用いた漆の分析の方法の現状について共通認識を得るとともに、人文科学の研究者との協業により、具体的にどのような成果が想定されるかについて議論を深めることができた。

日本における漆利用の嚆矢を明らかにするため、植物学、考古学、化学分析の研究者との協業により、縄文時代遺跡出土漆製品の¹⁴C年代測定を3年間にわたっておこなった。国内の

漆利用の時期差、地域差を検討する上で非常に有用であるため、対象遺跡を全国的に広げ、分析点数を増やし¹⁴C年代測定例を蓄積した。

¹⁴C年代測定法による漆分析は、分析件数もまとまってきており、それらの結果を地図上におとすことによって、縄文時代に始まる漆の初期利用の推移をたどることが概ね可能となってきた。漆の主成分の違いを同定できる熱分解—GC/MS分析は、東南アジアから東アジアにおける漆液の流通について新たな視野を与えうる手法で、その方法も確立してきているが、確実に試料数を増やすことが今後の課題である。また、Sr同位体比分析法は大陸と列島の漆の区別を可能とする方法として注目されているが、国内の漆の地域差をも同定できる可能性があることがわかったため、今後は、こうした観点での古代出土資料等の分析によって国内における漆の生産と流通の歴史的解明に役立てることが期待できる。

(3) 現地調査

沖縄・金沢・岩手・青森において多分野の研究者が合同で現地調査をおこない、現地の研究者・技術伝承者等と交流をおこなったことにより、漆文化の地域的な展開や各時代の特徴などを総体的に把握することができた。

(4) 基礎データ集成

考古学分野における出土漆製品の基礎的データとするために、発掘調査報告より漆製品出土遺跡一覧を作成した。特に、一大消費地であった近世江戸における漆・漆製品の流通と消費の実態については、考古学および文献史学の研究者の協業によって明らかにする必要があるが、そのためのデータが乏しいことから、遺跡一覧の作成と同時に出土遺物の実測図や観察表の集成をおこない、今後の研究に役立てられるよう整理した。作成したデータは、展示に活用できるようにした。

5. 企画展示・国際シンポジウム等の開催

(1) 企画展示の開催

3年間の共同研究の成果公開の一環として、国立歴史民俗博物館企画展示「URUSHI ふしぎ物語—人と漆の12000年史」を、2017年7月11日（火）～年9月3日（日）の期間に国立歴史民俗博物館企画展示室AおよびB室において開催した。会期中の企画展示入場者は23,080人、展示図録2,500部を完売した。以下に展示の概要を報告する。

ウルシとその仲間が生育する東アジアおよび東南アジアの諸地域では、それぞれ特色ある漆工技術が発達し、ユニークな文化をかたち作ってきた。漆文化圏とも呼びうるこれらの地域にみられる漆にまつわる文化は、多くの共通点をもち相互に影響を与え合う反面、実際には、利用される樹木の種類の相違や気候風土、民族などによって、それぞれの個性を強調する方向で展開している。

本展示は、このようなアジアの漆文化の総体を視野に含めつつ、考古学・文献史学・美術

史学・民俗学・植物学・分析科学などからの多視点的なアプローチにより、縄文時代から現代にわたる日本列島の漆文化を総合的にとらえた、日本で初めての展示である。

2013年度から2015年度にかけて国立歴史民俗博物館がおこなった展示型共同研究「学際的研究による漆文化史の新構築」による成果にもとづき、本展示ではとくに以下の観点に留意しつつ展示を構成した。(1) 植物としてのウルシの特性とそれを利用する多様な漆文化について、現代的な視点を交えて考察する。(2) 国内外におけるウルシ(植物)・漆(樹液・塗料)および漆製品の流通と技術交流について、各学問領域に共通する「交流」の視点からとらえる。(3) 新たな自然科学的分析手法の開発による漆文化の解明に向けた最新の研究について、これらの研究の方法を紹介するとともにその成果と今後の可能性を提示する。

本展示の最大の特徴は、漆文化に関わる美術・考古・民俗・文献・植物標本資料などを用いて、琉球・アイヌを含む列島全体の漆文化史を総合的にとらえる初めての試みであったことである。また植物学との協業による植物としてのウルシと人との関係史の最新の研究状況や、各種分析手法による漆研究のめざましい進展を、実際に分析された資料とともに示すことで、文理融合の学際研究の重要性と可能性とを、研究者のみならず、漆生産者や一般市民にむけて発信することができたことも大きな成果であった。

展示は、館蔵資料および国内各地からの借用資料を用いて、縄文時代から現代までの時系列に並べるのではなく、漆文化史をとらえる上での観点ごとに配列し、第1章「ウルシと漆」、第2章「漆とてわざ」、第3章「漆とくらし」、第4章「漆のちから」、第5章「漆はうごく」、第6章「これからの漆」の6章で構成した。展示資料は、総出品件数674、細かく数えると1000点に迫るものであり、国宝5件、重要文化財65件、その他県指定・市指定品などを含み、質・量ともに充実した内容であった。

展示プロジェクトが意図した趣旨は、来館者に十分理解され、「歴博にしかできない展示」「オール・アバウト・ウルシ」というような好意的なキーワードによる評価を得ることができた。(参考：谷川章雄氏による展示批評、総合誌『歴博』206号、平成30年1月30日発行号)

最新の学術的な成果を盛り込んだ、企画展示としてはやや専門的なテーマでありながら、2万3千人を超える入場者数を獲得できたのも、またとない漆関係の展示という評判が広まったためと感じている。とくに、図録の売り上げが、入場者数の約1割に達したこと、終了後も完売した図録に関する問い合わせが続いたことは、本展示への評価の高さを示している。学界のみならず、漆産地や漆製作者からの関心が高く、展示会期中から終了後に関連学会の会報への執筆や研究発表を数多く依頼された。

関連行事として、歴博講演会や歴博フォーラム、ギャラリートークのほかに、日本漆アカデミーとの共催で講演会を開催し、漆掻き職人による漆掻きの実演をおこなったほか、くらしの植物苑観察会においても石器を用いた縄文時代の漆掻きの実演をおこなうなど、展示内容のより深い理解を促したが、いずれも多くの参加者を集めて好評を得た。

なお、本展示の関連展示として、第3展示室特集展示「楽器と漆」を同時開催(2017年7月11日～9月3日)したほか、本展示は、浦添市美術館との共催により、同館にも2017年9月15日～10月22日の会期で一部の展示資料を巡回した。

展示プロジェクト（◎は展示代表者，○は副代表者）

岩淵 令治	学習院女子大学国際文化交流学部 教授	
岡田 文男	京都造形芸術大学芸術学部 教授	
北野 信彦	龍谷大学文学部 教授	
工藤 紘一	岩手県立博物館 研究協力員	
鈴木 三男	東北大学 名誉教授	
竹内奈美子	東京国立博物館 学芸研究部列品管理課登録室長・貸与特別観覧室長	
多比羅菜美子	文化庁文化財部美術学芸課	
都築由理子	早稲田大学人間科学学術院 助手	
中里 壽克	東京文化財研究所 名誉研究員	
永嶋 正春	学識経験者	
能城 修一	明治大学黒曜石研究センター 客員研究員	
宮腰 哲雄	明治大学 名誉教授	
宮里 正子	浦添市美術館 館長	
山崎 剛	金沢美術工芸大学美術工芸学部 教授	
吉田 邦夫	東京大学総合博物館 特招研究員	
四柳 嘉章	石川県輪島漆芸美術館 館長	[以上館外]
○工藤雄一郎	考古研究系 准教授	
小池 淳一	民俗研究系 教授	
齋藤 努	情報資料研究系 教授	
鈴木 卓治	情報資料研究系 教授	
林部 均	考古研究系 教授	
◎日高 薫	情報資料研究系 教授	[以上館内]

(2) 歴博講演会、歴博フォーラム等の開催

- ◇第401回歴博講演会「漆芸からみえる沖縄のすがた」7月8日（土） 宮里 正子（浦添市美術館・館長）
- ◇第402回歴博講演会「世界史の中の漆文化」8月12日（土） 日高 薫（国立歴史民俗博物館）
- ◇第105回歴博フォーラム「URUSHI ふしぎ物語一人と漆の12000年史」8月5日（土） 国立歴史民俗博物館講堂，参加者 238名
 - 報告①「植物としてのウルシとその利用」能城 修一（明治大学黒曜石研究センター）
 - 報告②「中世の漆器生産と流通」四柳 嘉章（石川県輪島漆芸美術館）
 - 報告③「ウルシの伝承」小池 淳一（国立歴史民俗博物館）
 - 報告④「漆器の領分—婚礼調度の世界」竹内 奈美子（東京国立博物館）
 - 報告⑤「桃山文化期における東南アジア産輸入漆の調達と使用」北野 信彦（龍谷大学文学部）
 - 報告⑥「海を渡った漆器」日高 薫（国立歴史民俗博物館）

総合司会：工藤 雄一郎（国立歴史民俗博物館）

◇講演会「漆掻きの技術と文化」7月28日（金） 国立歴史民俗博物館（日本漆アカデミーと共催）

報告①「縄文時代の漆文化」工藤 雄一郎（国立歴史民俗博物館）

報告②「漆を掻くとはどういうことか」竹内 義浩（竹内工芸研究所）

報告③「漆流出メカニズムと漆増産の取り組み」田端 雅進（国立研究開発法人森林研究・整備機構
森林総合研究所東北支所）

◇くらしの植物苑観察会「縄文時代のウルシと漆」7月22日（土）工藤 雄一郎（国立歴史民俗博物館）

◇ギャラリートーク 12回（小池 淳一，工藤 雄一郎，日高 薫，林部 均）

附記：本共同研究終了後，メンバーの一人であった竹内奈美子氏が逝去された。あらためて共同研究，企画展示および関連行事における貢献に感謝するとともに，謹んで哀悼の意を表したい。

（国立歴史民俗博物館研究部）